

令和 6 年 5 月 24 日現在

機関番号：12102

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K13194

研究課題名（和文）近世アムド・チベット社会の形成と清朝支配の変容

研究課題名（英文）The formation of the early modern Amdo Tibetan society and the transformation of the Qing rule

研究代表者

岩田 啓介（Iwata, Keisuke）

筑波大学・人文社会系・助教

研究者番号：60779536

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、清朝の公文書、チベット語の伝記史料、外国人の調査記録や現代中国の地方志等を網羅的に分析し、近世アムド・チベット社会形成の背景を分析した。その結果、清朝が18世紀中葉のジュンガル滅亡によりアムド地方の統治に関与する必要がなくなった一方で、ダライラマ政権はモンゴル遊牧勢力との間の紐帯を維持するために現地の交通拠点の確保に積極的に関与したことを見出した。そして、近世のアムド地方では、清朝の主体的関与の外で近代に繋がるチベット社会が形成されたことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、前近代史と近代史、ならびにチベット研究と清朝研究・内陸アジア史研究とを結びつける成果を得られ、当該期の研究に有効な手法を提示できたことに学術的意義がある。また、チベット史を境界地域から捉え直す視座の重要性を提示できた。加えて、近年立て続けに刊行された清朝史料の価値を提示できた点も重要である。本研究は、現代の民族問題の背景を理解する上で必須といえるもので、成果の一部を概説書のコラムや一般向け雑誌への記事として掲載する等、社会的意義も認められる。

研究成果の概要（英文）：This research project examines the background to the formation of early modern Amdo Tibetan society through a comprehensive analysis of the Qing Empire's administrative documents, Tibetan biographical sources, foreign research records, and contemporary Chinese local annals. As a result, it can be concluded that while the Qing Empire no longer needed to engage in the governance of the Amdo area after the destruction of Zhungar in the mid-18th century, the Dalai Lama government actively engaged in securing transport hubs to maintain ties with the Mongolian forces. It is also evident that in the Amdo area in the early modern period, Tibetan society connected to the modern period was formed outside the proactive involvement of the Qing Empire.

研究分野：清代チベット・モンゴル史

キーワード：チベット 清朝 アムド 青海モンゴル 交通路 ダライラマ政権

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

漢地・チベット・モンゴル・東トルキスタンの接壤地帯に位置するアムド地方(東北チベット:現在の青海省を中心とする地域)では、18世紀中葉からチベット人の活動が活発化して、家畜の掠奪等により、それまでの支配層であった青海モンゴルを圧迫するようになる。このチベット人の活動は、青海モンゴルを盟旗制のもとで間接的に支配していた清朝にとって、境界地帯の安定を脅かすものであった。しかし清朝は、これに有効な対策を実施できず、青海モンゴルの弱体化を招いた。

以上のプロセスについては、従来の研究では清朝支配の弛緩を示すものとみなされてきた。しかし、その所説は王朝の最盛期以降に支配が弛緩するという単純な図式で説明したに過ぎず、具体的な検証を経てこなかった。かかる傾向は、王朝の最盛期へと至るプロセスに主眼が置かれてきた清朝史研究にも広く見られる。特に、漢地以外の地域では、清朝支配下に編入される以前は政治史に重点が置かれ、以降は制度史に偏重してきた。つまり、前近代史と近代史の間の研究の断絶が、単純な図式化を生み出しているのである。

アムド地方での18世紀中葉以降のチベット人の活動は、清朝史の観点から支配の弛緩の象徴として矮小化するのではなく、チベット史の観点から近代へと繋がる社会形成の胎動とみなす必要がある。そのうえで具体的な作業として、18世紀中葉以降の清朝の政策史を跡付け、社会変容の背景を社会に内在する要素と清朝の統治政策による影響の双方から分析しなければならない。それにより、弛緩と評されてきた清朝支配の変容は何が原因となっていたのか、そして清朝の政策が社会にいかなる影響をもたらしたのか、その具体像を明らかにすることができる。そして、最盛期の前後で隔絶していた清朝史の課題を克服し、一貫した歴史像の構築を実現できると考えられるのである。

2. 研究の目的

本研究は、18世紀から19世紀を主な対象として、漢地・チベット・モンゴル・東トルキスタンの接壤地帯に位置するアムド地方における近世チベット社会の形成過程を、清朝の政策と現地社会の動向との相互関係に基づいて分析し、多様な世界や人間集団を包摂する清朝支配の変容とチベット社会の関係の動態を解明することを目的とする。

具体的には、清朝の多言語の档案史料(公文書)を用いて清朝のアムド地方に対する政策史を分析するとともに、歴代ダライラマの伝記をはじめとするチベット語史料を利用してアムド地方のチベット人の動向を跡付ける。加えて、近代の外国人の調査記録や現代中国の地方志等から、牧畜を主たる生業とするアムド地方の社会に関する記述を網羅的に抽出する。それにより、アムド地方に対する清朝の統治政策の特徴と、それを受けた社会変容の具体的なプロセスの提示を目指す。そして、近世アムド・チベット社会の形成を近代へと繋がる一連の歴史的経緯として明らかにする。

3. 研究の方法

本研究の目的を実現するために、アムド・チベット社会の実情を反映する題材として、(1)アムド地方のモンゴル人の生計、(2)チベット・モンゴル間の交通、(3)清朝の防衛体制の3点に絞って考察を進めた。これらは、18世紀から19世紀にかけて頻発した掠奪と関連するものであり、その背景を考察する上で必要な要素である。

以上の3点に関する清朝の政策史の考察には、清朝档案史料の分析が中心となる。具体的には、「軍機処滿文録副奏摺」や「滿文硃批奏摺」等の中国第一歴史档案馆で収集した史料の分析を進めた。また、新型コロナウイルス感染症の流行等により当初計画していた海外での史料調査を一部縮小し、その代替手段として『軍機処雍正朝滿文議覆档訳編』や『西藏自治区档案馆館藏蒙滿文档案精選』等の新出の清朝档案史料を収集して分析した。また、アムド地方のチベット人の活動については、歴代ダライラマの伝記のほか現地で活動したジャムヤンシェーパらの伝記を活用して考察した。また、アムド・チベット社会の実態については、当事者が残した史料が限られるため、19世紀後半以降に外国人が残した現地調査の記録や旅行記、現代中国が実施した社会歴史調査や県志等を網羅的に収集して考察を進めた。併せて、モンゴル国において前近代遊牧国家の史跡を中心とするフィールド調査を実施し、遊牧国家における集落・都市の形成とその自然環境の条件を整理した。

4. 研究成果

以下の(1)~(3)の個別のテーマに関する研究成果を学会発表・著書・論文等により公表した。

(1) 清朝支配下の青海モンゴルの生計

1720年代に始まる清朝の青海モンゴル支配が、18世紀後半以降の青海モンゴルの弱体化にいかに関わったのかを清朝史料に基づき分析し、以下の知見を得た。

清朝支配の開始以前、青海モンゴルはアムド地方のチベット人を支配下に置いて徴税し、その一部を布施することでダライラマ政権と政治的・経済的に結びついていた。清朝は1720年代にこの徴税を廃止したが、それにより彼らの生計が悪化したとの認識が清朝と青海モンゴル王公の間で共有されていた。また、清朝はジュンガル対策の一環として、アムド地方北部の大通河流域の青海の牧地を南方に移動させた。しかし、移住先の牧地の環境に適応できない王公が散見されたため、この政策も同様に青海モンゴルの生計の悪化を招いたとみられる。

また、18世紀中葉に中央チベットの政権を掌握していたギェルメナムギェル家と青海モンゴルの河南親王家の間での婚姻計画の経緯を分析し、次の事実を確認できた。グーシハン以来の青海モンゴルの権威は、18世紀中葉においても清朝・チベット間で認識されており、この婚姻計画はその権威を利用したものであった。しかし、当時の河南親王家では嗣子が相次いで病死したため、計画の実現が難航していた。結果的に1750年のギェルメナムギェルの死により計画は実現せず終わるが、この間の当事者の議論から、青海モンゴルの衰退の背景として牧地の環境に問題があると理解されていたことが明らかになった。

(2) アムド地方のチベット・モンゴル間交通

東北チベットのアムド地方は、モンゴル・チベット間の往来で必ず通過する地域である。それゆえ、モンゴル遊牧勢力との紐帯を基盤としたダライラマ政権にとって、アムド地方の交通路の維持は重要な課題であった。そこで、その交通路利用の時代による変遷と、それに対する清朝・ダライラマ政権の関与の実態を清朝史料・チベット史料・外国人の調査記録に基づき、以下の通り明らかにした。

チベットとアムド地方を結ぶ交通路には主に3つのルートがあり、各交通路には河川の水量の季節変化や移動時の燃料確保、家畜利用等の点で特徴があった。そのなかで、最短ルートはチベットから清朝への年班の使節が利用していたが、18世紀後半にはゴロク族の掠奪が頻発するようになった。他方、清朝は1720年代に四川を経由してチベットへ向かうルートを確保したことで、アムド地方を経由するルートを実質的に放棄していった。そのため、チベットの使節保護のための軍事負担を避けるため、清朝は使節が利用する交通路を最短ルートからツァイダム盆地経由のルートへと変更させた。このゴロク族の活動の活発化は、清朝支配により青海モンゴルの活動が抑制されたことも影響したとみられ、清朝支配によって交通路の利用にも変化が生じたと考えられる。

さらに、これに関連する問題として、ダライラマ政権の視点から、アムド地方を通過するチベット・モンゴル間交通をいかに維持していたのかについて、ラサ北部に位置する中央チベットの交通の要衝ナクチュとツァイダム盆地に注目して分析した。そして、ダライラマ政権が両地域でグーシハンのオイラト由来の人々を直轄にし、通行証の点検や移動に必要な家畜の管理等を担わせていたと考えられることが明らかになった。

(3) アムド地方における清朝の対ジュンガル防衛の展開

清朝はアムド地方の青海モンゴルに対して盟旗制を適用して間接的に支配したが、18世紀前半に対ジュンガル防衛策として部分的に軍を駐留させる。その防衛策がいかなる背景で計画され、具体的にどのように実施され、その後どのように展開したのかを、清朝史料に基づき明らかにした。

清朝は、1710年代にジュンガルへの軍事上の対策として、アムド地方西部のツァイダム盆地を要地として位置づけるようになった。1720年代後半には、実際にジュンガルから小規模な派兵による掠奪事件も発生したことから、清朝はツァイダム盆地に軍を常駐させるために築城や開墾の計画を進めた。しかし、清朝は冬季の寒冷・乾燥な気候に加え、夏季に湿地が広範囲に広がり軍馬の牧地を十分に確保できないといった、自然環境の問題に直面した。そのため、ジュンガルとの講和が実現すると、軍事費の負担を抑制するために清朝は軍の常駐計画を放棄し、少数の兵による偵察にとどめるようになる。そして、最終的に18世紀後半にジュンガルが滅亡すると、偵察の必要もなくなり、アムド地方での防衛自体を放棄することになった。そして、清朝が18世紀後半にアムド地方への関与を減らした一方で、ダライラマ政権が現地に進出する余地が生じ、それがチベット・アムド地方間の交通の維持に繋がったと考えられる。

以上の個別の成果から、本研究課題の成果を以下のように総括できる。清朝のアムド地方支配は、当初はジュンガル対策のための派兵や軍の常駐を目指した。しかし、アムド地方は寒冷で冬には水の確保に支障があり、夏は湿地のため軍の常駐に適さず、直接的な支配の困難に直面した。それゆえ、ジュンガルの滅亡を機に清朝はアムド地方から軍事的に撤退した。また、チベットとの関係では、四川ルートの維持こそが重要であり、アムド地方を経由するルートは清朝が主体的に維持する必要がなかった。ゆえに、18世紀後半から19世紀にかけてのアムド地方の社会変容は、従来の研究で指摘された清朝支配の弛緩ではなく、清朝が主体的な選択としてアムド地方への関与を弱めたことに原因があると推測される。そして、ダライラマ政権はモンゴル遊牧勢力との繋がりを保つためにアムド地方の交通路を維持する必要があり、西部のツァイダム盆地に政権独自の交通基盤を確保していったとみられる。

これらを踏まえ、今後は近年公開が進んだダライラマ政権の公文書を活用することが必要になると考えられる。本研究に利用した新出史料である『西藏自治区档案馆馆藏蒙满档案精選』

については、史料の分析を行ない、その史料価値と研究可能性について整理し、史料の解題を発表したが、この史料の利用も含め、本研究課題では断片的にしか論及できなかった 19 世紀の動向についてさらなる研究の進展が必要である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 岩田啓介	4. 巻 68
2. 論文標題 18世紀前半の清朝の青海における対ジューンガル防衛の展開 ツァイダム盆地を中心として	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 社会文化史学	6. 最初と最後の頁 26-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩田啓介	4. 巻 68
2. 論文標題 1750年チベット政変前夜の清朝・チベット・青海モンゴル関係 ギュルメ=ナムギェル家の婚姻をめぐる	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本西蔵学会々報	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 星 泉、岩田 啓介、平田 昌弘、別所 裕介、山口 哲由、海老原 志穂	4. 巻 6
2. 論文標題 [D12] 失われゆく牧畜文化を活写するための「フィールド・アーカイビング」：『チベット牧畜文化辞典』編纂の経験から	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 デジタルアーカイブ学会誌	6. 最初と最後の頁 s198～s201
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24506/jsda.6.s3_s198	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 岩田 啓介	4. 巻 102
2. 論文標題 清代チベット・青海間交通路の変容	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 アジア・アフリカ言語文化研究 (Journal of Asian and African Studies)	6. 最初と最後の頁 5～26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15026/116714	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 星 泉、岩田 啓介、平田 昌弘、別所 裕介、山口 哲由、海老原 志穂	4. 巻 5
2. 論文標題 [32] チベット・ヒマラヤ牧畜農耕資源データベースの構築 フィールドデータと文献データをつなぐ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 デジタルアーカイブ学会誌	6. 最初と最後の頁 s164～s167
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24506/jsda.5.s2_s164	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岩田啓介	4. 巻 7
2. 論文標題 チベットの呪いと乾隆帝	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 チベット文学と映画制作の現在SERNYA	6. 最初と最後の頁 165-170
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩田啓介	4. 巻 20
2. 論文標題 『西藏自治区档案馆馆藏蒙满档案精选』について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 満族史研究	6. 最初と最後の頁 51-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件(うち招待講演 1件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 Keisuke Iwata
2. 発表標題 Impact of the Qing Empire on Transportation and Ethnicity in Amdo
3. 学会等名 中央研究院歴史語言研究所公開講座(招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 岩田啓介
2. 発表標題 ダライ=ラマ政権下のチベット・モンゴル間交通とナクチュ支配
3. 学会等名 第44回歴史人類学会大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Keisuke Iwata
2. 発表標題 Pastoralism in Nakchu acted as a transportation base between Tibet and Mongolia in the early modern period
3. 学会等名 16th Seminar of the International Association for Tibetan Studies (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岩田啓介
2. 発表標題 18世紀中葉の清朝・チベット・青海モンゴル関係の一齣：ギェルメ=ナムギェル家と青海モンゴル河南親王家の婚姻をめぐって
3. 学会等名 第69回日本チベット学会学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 星 泉、岩田 啓介、平田 昌弘、別所 裕介、山口 哲由、海老原 志穂
2. 発表標題 チベット・ヒマラヤ牧畜農耕資源データベースの構築 フィールドデータと文献データをつなぐ
3. 学会等名 デジタルアーカイブ学会第 1 回 DA フォーラム
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岩田啓介
2. 発表標題 清代チベット・青海間交通路再考
3. 学会等名 第56回社会文化史学会大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 岩田 啓介	4. 発行年 2021年
2. 出版社 汲古書院	5. 総ページ数 344
3. 書名 汲古叢書170 清朝支配の形成とチベット	

1. 著者名 岩尾一史、池田巧編（岩田啓介他、分担執筆）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 臨川書店	5. 総ページ数 360
3. 書名 チベットの歴史と社会：上（「熬茶」と中央ユーラシアの仏教世界」pp. 119-121、分担執筆）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------